

人と人が結びあえる社会であり続けるために

～学校・地域そして保護者はどうあるべきか～

小野田正利（大阪大学大学院教授）

1. けったいな大阪のおっさんですいません

大分の皆さん。ただ今、紹介いただきました大阪大学の小野田と申します。こんにちは。大分大学の山崎清男先生から、今日、11月1日の講演を依頼されたのが、もう半年以上前になります。今日が、栄えある第1回目の記念すべき教育の日の講演を「本当に私がやっているのか？」というようなことを申しました。しかもその内容が、なんと「無理難題要求・イチャモン」であるわけです。「これでいいのか」という形で何度も念を押したところ、「ぜひ、やってくれ」と。大分県教育委員会のほうからも、「それで、お願いしたい」というように言われましたので、そこまで言うのなら、「じゃあ、しゃべっちゃうぞ」ということで、今日、この場に来させていただきました。

本来ならば、東京大学の佐藤学さんや荻谷剛彦さんなどが、最も相応しいかと思いますが、まあ大阪のけったいなおっさんの私、小野田が、これから80分ほど話をさせていただくという機会を与えていただきました。本当に有り難うございます。

「お前、なんちゅう格好してしてんねん」と思われるかもしれません。「（大阪・道頓堀の）食い倒れ人形のような服着てるやんけ」と思われるかもしれません。実は私は、冠婚葬祭以外はネクタイしないということで、もちろん卒業式とか結婚式とか、そういったのはちゃんとするんですが、いつもこんな格好で走り回っています。

私は時間さえあれば学校現場に出向いて、その学校で何が起きているかということ、いろんな形でつぶさに見るとするのが大好きで、そういった角度から、いろんなことをさせていただいております。今日も実は、その一端を皆さん方にお話をさせていただくというつもりで用意してきております。

入り口のところで資料として、一つは私の似顔絵が書いてあります『人と人が結びあえる社会であり続けるために』というプリント刷りをされたのがあるかと思えます。もう一つが、同じタイトルで副題に『学校への要望、苦情そしてイチャモン』っていうふうにつけている冊子があるかと思えます。この二つは、私のほうで用意をさせていただいた資料であります。その冊子、ただで差し上げます。べつにお金とりませんのでどうぞ。

この会場の中には半分ほど、学校の先生方がおられるって聞いたのですが、研修会等で、これだけいっぱい資料を用意する講師は、たぶん他にいないんじゃないかと思えます。このあと寝ていただいても、十分何を話したか、全部ここに書いてあります。こういう「至れり尽くせり」のことをやっている、そういうサービス精神旺盛の人間であります。

2. 学校は地域の「迷惑施設」？！

さて、今日のテーマは『人と人が結びあえる社会であり続けるために』という、そういうタイトルです。これは、私自身が教育学をやりながら、どういう形で親や教職員やあるいは地域の人が結びあいながら、子どもの成長発達のために協働することができるか、ということです。これは私自身、30年近く教育学をやりながら思い続けてきた事柄でもありました。

ところが残念なことに、そういう現実とは違うような現象が、ここ10年ぐらい前から全国のあちこちの

所で出てくるようになりまして。ちょうど今、11月ですから、運動会のシーズンもすべて全国どこでも終わっているかと思いますが、運動会のシーズンになりますと練習が始まります。いくつかの学校の中で、「運動会をやめろ!」「練習の音がうるさい!」「音楽を鳴らすんじゃない!」。そういう形での地域からの苦情っていうのが、小学校や中学校に飛び込むようになったのが、今から15年ほど前のことでもあります。

私は、長崎大学というところに、今から10年前までおりましたが、そこで、ある小学校に学生たちを連れていったときに、運動場に奇妙なものがあるのに気がつきました。校庭にスプリンクラーが設置されておりました。「なんで校庭にスプリンクラーがあんねん?」というふうに思ひまして、校長さんに聞きました。実は、長崎っていうのは、海からすぐ山です。その間のところを切り開いた形で学校がつくられているんですが、運動場の下にも家があり上にも家がある。冬の風の強い日に砂ぼこりが舞う。そうすると、「砂で洗濯物が汚れる。何とかしろ!」こういうふうな匿名の電話や苦情っていうのが、ずいぶん相次いでいました。それに押される形で、教育委員会がやむを得ずスプリンクラーを設置したということでした。今、確かに地面を見れば、公園が学校の運動場ぐらいしか地面が土のところはありません。そういったようなところっていうのは、確かに一緒に共存していくっていう関係の中においては、学校というのは迷惑な存在だというふうに映るといふこともあるのかもしれない。

4カ月前に、(大阪大学の学生で)教育実習生としてお世話になっている一つの学校に行きました。神戸にあります、神戸のあたりではわりと有名でお嬢様学校で進学校のところなんです。そこに挨拶に行くにあたって行き方を調べてみたところ、阪急の御影駅っていうところから歩いて20分ぐらいあるんですが、行き方が二通り書いてあったんです。中学生用の通学路と高校生用の通学路と二つあるんです。私は挨拶を終えたあと、「なぜ二つあるのか」って聞いたところ、年配の教務部長さんは、重い口を開いてというよりは、半ばあきれたような顔をしてこんなことを言いました。「自分たちの学校は、この地に越してきて19年経ちます。通学の途中に、女の子のキャーキャーいう声がうるさいから家の前を通るな!」と言われたのです。」こういうのが相次いであったんだそうでもあります。しかし、公道としての道を通らないまま学校に行くわけにはいきませんので、やむを得ずとった方法が人数を半分にするという方法です。ですから、それが中学生用と高校生用の通学路だったっていうことです。

さらに、こんなことを言われました。「19年前に越してきたときに、それはそれは惨めな運動会をしました。2年間、マイクなし、音楽なしの体育祭をしました。」と。これが私立の、俗に言われる名門校というところでも、近隣住民との関係を含めたところの実情を表しています。さすがに、この「惨めさ」に、何とかしたいという思いから3年目に、運動会の練習の前の段階から近所を全部一軒一軒回って、「よろしくお願いします」という、そういうことを繰り返してようやく普通の体育祭を再開したということです。

3. 「開かれた学校」づくりには条件の整備が必要

私は、こういうような現象っていうのが、10数年前から起きてきているっていうことに、長崎大学にいたときから気づいておりました。学校っていうのが、地域あるいは保護者の人たちにとって、どういう存在として見られているか。教え子から悲鳴があがってきて、必要に応じて学校現場に出向いて、その解決に走り回ったこともありました。そういったような事柄を、実は本格的に研究しないとアカンのやないかというふうに思いはじめたのが、今から5年前のことだったわけです。こういう研究の発想っていうのは、ずっと昔から私はもっておりました。どうやって保護者と地域住民そして学校がお互いに手を携えるかっていったときに「今のままでは条件があまりにも不足している」というのが、私の中の思いとしてずっとありました。

1990年代の後半から、文部科学省(当時は文部省)を中心に『開かれた学校づくり』だとか、あるいは『家庭・学校・地域の連携』、そういったようなことが盛んに言われるようになりました。それ自体は、

確かに素晴らしい理念であり良いことのように思えるわけですが、それをつくっていくための条件が、残念ながら日本の学校には、ほとんどないのではないかというふうに思ったわけです。お互いが手を携えるためには、お互いがどういう存在かっていうことを分かりあってこそ、はじめて意味があると思います。ところが現実には、学校というところに対して保護者の一部の人たちの中には相当な誤解もある。教職員の側も、親たちの置かれている状況に対する認識が、必ずしも十分あるわけではない。まず、この間の溝を埋める作業をすることが大事ではないか、というふうに思ったわけです。

例えば、前者の学校に対する誤解っていうところでは、学校にはいくらでも金がある、というふうに思っておられる保護者の方ってというのは何人かおられます。あるいは大分でもそうだと思いますが、小学校や中学校で給食があります。「学校の先生は、ただで給食を食っている」と、こう思っている保護者の方が、実は半分以上おられるわけです。いいえいえ、ちゃんと払っているんです。小学校の場合は、給食費は低学年と高学年で食べる量が違いますから給食費も違います。ちゃんと1年生の担任の先生も、高学年分の給食費をちゃんと払っているわけです。そういうような、ごくごく身近なレベルのところについても、必ずしもきちっとした形で理解されていないのではないか。ここを何とか埋めないと、えらいことが起きるぞっていうのが、私なりのずっと一貫した思いでした。

4. 保護者のためのガイドブック『片小ナビ』づくり

実は私は、今日のお話の中心となるイチャモンの研究をすぐさま最初にやったわけではなくて、まず最初は、オモテ文化からということで、今から5年前に一つの取り組みをはじめました。大阪に吹田というところがあります。日本で最初の万博が開かれた万博公園があるところなんです、その教育委員会のアドバイザーをしていた関係で、一つの実験的な試みとして、「保護者のための学校ガイドブックっていうのを作ってみよう」ということを言い出しました。

そこで紹介してもらったのが、吹田市立片山小学校というところでした。その小学校に、私たちの研究室の大学生や大学院の学生といっしょに、2000年の5月から入りまして、そしてガイドブック作りを始めました。しかし実は、これはただ単にそれを作るってことを始めるという、そういうやり方だけではありませんでした。私は、できるだけ今の学校現場のしんどさを分かるべきだっていう思いもありますから、そして、学生たちに学校というところは、どういうところかを分かってもらいたいという思いもありましたから、若い学生達の労働力の提供から始めたわけです。1年間使わなかったプールを綺麗にする。その作業から、私たちは始めたわけです。1年間使わなかったプールって汚いですね。そういったような段階のところから、私たちは入りはじめて、そして学校に行っては、机運び、草むしり、ペンキ塗り、そんなことを何度も何度もやりました。

そういった中で、みんな仕事を手伝ってへろへろになった後で、保健室の先生に、「先生、すみません。ちょっと10分ほど時間をいただけませんか」というふうなことを言いながら、「手伝ってもらったからな。ほんじゃあ、(あなたたちの)インタビューに応じたるわ」と言われて、それでそういう時間を得ながらいくつかの情報収集をし、学校の教職員、それからPTAの方たちからも情報収集を得ながら、2001年の3月に『片小ナビ~保護者のための片山小学校ガイドブック』っていうのを作ったわけです。

この手のものが、実は日本にも世界にもどこにもなかったんですが、私たちは、その片山小学校っていうところが、どんな学校で、何をしてるところで、親は何を知っていなければいけないか、そして、どういったところで(お互いに)手を携えることができるかという、そういう方向性を探るためのものを作ったわけでありまして。それを大学の研究費で作成し、すべての子どもたちに渡しました。2年目も同じことを続けました。3年目も同じことを続けました。打ち上げ花火で終わるのをやりたくなかったからです。何年か続けるというのが大事です。そして本日、私が手元に持ってきているのが2003年版の『片小ナビ』です。こ

の段階で作ったものの中には、地域の様々なお店のコマーシャルを入れてあります。ここから広告費をとって、こういう冊子を作るというふうなことを3年間続けてきました。これが私なりに学校に関わって、保護者と地域住民が「その学校っていうのが、どういう学校で、自分たちが何ができるか」ということをお互いに考えてもらう一つの仕掛け作りということで、こういう学校ナビづくりをやってきたわけです。

私たちの取り組みは一つの実験的なものでしたから、3年間学校に入りまして、これをやめました。けれどもその後、この2年間の間に、これを参考にして全国で100ぐらいの学校が、こういったものを作りたいというようなことで作りはじめていまして、私の手元に60校ほどのものが来ております。こういうような形で（連携のための）オモテの条件を整えるということから、つまりどういう連携のための条件をつくるか、っていうのをやっていったのが最初のスタートでした。

5. 連携を難しくしているウラの現象の増加

ところが実は、これをオモテだとすると、もう一方で、残念ながらウラがあるわけです。先ほどは、一つの例として、私立学校での体育祭・運動会のことを言いました。そういうふうなことが、私の耳にもたくさん飛び込んでくるということが幾度もあったわけでありまして。

そのことを象徴する一つの例を、お話ししましょう。5年ほど前に、大阪のある町の社会教育委員を私がやっていたときに、課長がたまりかねて、「小野田先生たち分かってほしい。自分たちが、毎日、どんな思いで役場で仕事をしているか」ということを提起しました。様々な形で、嫌がらせ的なイチャモンが町役場にいっぱいきておりました。

背景には、こんなことがありました。ごくごく他愛のないことがあったんですが、子ども会対抗のソフトボール大会が毎年開催されていて、町民グラウンドで行っていたところ、ある子どもがボールを打ちまして、一塁に駆け込んだんですが、審判は「アウト！」というふうに宣告しました。ところが、駆け込んだ子どもは、「今のはセーフだ！ 審判、お前はどこに目をつけとんだ！」っていう形でもって、小学校5年生の子が、大人の審判の人に対して食ってかかっていったわけです。それでもって、その判定をめぐる数分間試合が中断したところ、三塁側のグラウンドのほうから、大人集団が、ドドドドドッとやってきて、「そうや、今のはセーフだ。審判、お前なんちゅうやつや！」っていう形で、ぼろかすに言ったわけです。

すると今度は一塁側のほう、守備側から、「何を言ってる。審判が正しい」ということで、「たかが…」っていう言い方はおかしいかもしれませんが、子ども会のソフトボール大会の判定をめぐる、そこで大騒動が起きちゃうんです。一番ボロカスに言われたのは審判の方でした。審判の方は、青少年指導員というボランティアで子どもの健全育成のためにやっている方でした。あまりにボロカスに言われるものですから、被っていた帽子をポーンと地面に叩きつけて、「おれは、好きでここで審判やってるんとちゃう。だいたいやな、ここでソフトボールやるからこんなことになんねん！」。こういうふうになるんです。すると、みんな、その剣幕に「そうだ、そうだ、その通りだ。」ということになって、そこから後あとがむちゃくちゃになっていきました。

「誰だ、責任者は？」。ソフトボールの主催者は教育委員会の生涯学習課なんです。生涯学習課が、その後、責任者としてつるし上げにあっているんです。これって、どこがおかしくありません？ でも、これに似たような事っていうのは、皆さん方のところでも、ひょっとしたらあるかもしれないと思うんです。

もう一つの例。これは、私の出身地の愛知県での出来事です。数年前、小学校対抗のサッカーの試合をやりました。私の出身校でもあるんですが、その小学校は選手層も厚くて、この年、優勝候補と目されていましたが、残念ながら1回戦でてこずりまして0対0。決着がつかずPK戦になりました。そのところで、私の甥っ子、つまり弟の子どもが、もうまさにサドンデスの状態で、ここで入ったら勝ち、入らなかつたら負けというペナルティーキックを蹴る段になりました。そういった状況では当然、みんなでもって声援が飛

ぶわけですね。こちら側のその小学校の応援団のほうは、「頑張れ、入れろ！」とか言う。その一方で、相手方のチームのお母さん集団が近くにいたんです。すぐ横に。その母親集団の中から「外せ（失敗しろ）！」というヤジが飛んだわけです。このヤジが正しいかどうかって言えば「はしたない」の一言だろうと思います。しかし、親たちの思いからすれば、「外してほしい」というのが声に出ることは、いくらでもあることかもしれない。いや、それにしたって小学校の5、6年生のサッカーの試合でやることか、っていうならば間違っていることかもしれません。

でも、コトはそこから起きたわけですよ。甥っことはサッカー少年でしたが、みごとに外したんです。負けたんです。負けたとたん、どういう行動が起きたかっていうと、私の出身小学校のお母さんたちが車の数台に分乗して、そのままどこに行ったかという、相手チームの小学校の校長室に乗り込んでいったんです。それで、「校長さん！ あんたんとこのPTA、どないなってるまんねん！」ということです。「何のことでしょうか？」「サッカーの試合ですよ、サッカー！」「あの...、サッカーやってますよね？」「そうですよ。そこでね、あんたんとこのPTAのヤジが.....。ヤジのせいで（うちの学校は）負けた！」と。こういうことが起きたのです。それで「あんた（校長）じゃラチがあかん」ということで、この場合は、市の教育委員が2名出てくるわけです。市から教育委員が出てきて、それも夕方の5時から夜の9時過ぎまで、このことで校長室で大もめにもめるんです。

翌朝になって、くだんの校長先生が私の弟のところに来まして、「昨日は、息子さんに大変不愉快な思いをさせました。」って頭を下げたんで、「何のことですか？」と弟は聞いたところが、今のような話だったそうなのです。

お互い、隣同士にいて、そこでヤジが飛ばされたんです。だったら、「今のヤジはないんじゃないか」って、その場で言えばいいわけです。そこで言わないでいて、相手の学校に乗り込んでいって、「あんたんとこのPTAは何やってんねん！」って、こういう形で突っ込むという、こういう状況があります。翌週以後、この町のサッカーの試合では、次のようなピラが配られました。「応援での、はしたないヤジは謹みましよう」と。

6. イチャモン研究に対する私の思い

こういうことが、実は、全国のいろんなところで起きているといっても過言ではないというふうに思うわけです。私は、実は、そんなイチャモンが学校現場に様々な形で押し寄せている、これをどう考えるかをやっている、おそらく日本で最も変わったけったいな教育学者の一人なのかもしれません。

しかし、私は、日本の学校がどうなっているかっていうことを徹底して考えたいというふうに思っていますので、こういったことをやっているわけです。プリントの3ページの下のほうに書きましたが、誤解がないようにあらかじめ言っておきます。私は、保護者や地域住民の方が、学校に対して様々な形で要求を出すことを止めようと思ってやっているわけではありません。学校っていうのは、とことん地域と共に一緒に歩むべき存在です。そうであるが故に、保護者や地域から様々な形で「学校、こうやってよ！」「先生方、こうやってよ！」というふうに言うのは当然だというふうに思っているわけです。ましてや、私はこういったことを考える論文で博士の学位も取得した人間なんです。

ところが時として、なぜ保護者や地域住民の一部の方に、トゲトゲしいものの言い方になったり、あるいは逆に学校の側もその思いを受け止め損ねて、逆にこじらせていくってことがなぜ起きてきているのか。この現実をしっかりと見定めたいっていう思いでやってきているつもりなわけです。

私は、こういうものを研究するにあたって、三つ段階を分けておりました。それは「要望」、「苦情」、そして「イチャモン（無理難題要求）」です。この講演会場に来る途中に、車の中で大分県の教育委員会の人に聞きました。「イチャモンって大分でも通じます？」って言ったら、「分かります」って言うんで、そ

のままで、いまこの場では「イチャモン」って言わせていただきます。六文字熟語でいえば無理難題要求っていう言い方になるんですが、それでは固くなりますので、イチャモンという言い方をします。さて「要望」というのは、どこの誰かを名乗り出ていることが基本的に多くて、そして、その要望の内容そのものが、「やっぱりそれは学校がきちっとやるべきことだよな」というようなものが「要望」です。次の「苦情」というのは、どこの誰かを名乗り出てるケースもあれば、名乗らないケース、匿名というケースもあります。そして、それは「本来は、学校のやるべきことかな...?」というようなレベルのものが「苦情」であります。例えば、中学校レベルでよくあるのが、「おい、おまえんとこの中学生がコンビニの前でたむろしているやんけ。何とかせんかい!」。こういう形でかかってくるのがよくあります。これなんかはどう考えても、それは、たむろしているのが仮にそこの中学生だとしても、それを追いかけて行くのが、本当に学校の役目かどうかっていうことについては、幾分疑問があります。しかし、それも生徒指導の一環として考えていくと「やはり、ある程度必要かな?」こう思ったりもするやつであります。

最後の「イチャモン」というのは、当事者の努力によっても何ともならないようなものです。これを私は、「無理難題要求・イチャモン」というふうに名付けているわけであります。これらには、ずいぶんいろんなものがあります。例えば幼稚園のレベルですと、「うちの娘は箱入り娘で育てたいから、誰ともケンカさせるな!」そういう念書を、「園長、お前が書いて、俺に出せ」。こういうのが、ほんまにあります。これは、誰ともケンカさせない、つまりケンカさせないように、注意を払うことは確かにできますが、子どもってというのは、口ケンカも含めて、様々な人間的な摩擦を経ながら成長していく存在です。そのこのところを抜きにして、「念書を出せ」という形にくる。こうなってしまうと何ともならない。

あるいは、幼稚園にはいろんなオモチャとか遊具があります。当然、子どもですからそれを取りあってケンカになります。そうすると、「ケンカになるくらいだったら、そんなオモチャを幼稚園に置くな!」。こういうふうな形で要求が、先鋭化して出てくるということなんかもあつたりするわけです。小学校レベルでいけば、「私は、誰々さんのお母さんと仲が悪いから、うちの子同士は別のクラスにしてちょうだい」というふうなことがある。こういうことも出てくるわけであります。

中学校レベルでは生徒指導をめぐる問題も様々ありますし、あるいは、「うちの子どもが風呂に入らないから入るように言いにきてほしい」と、こういうようなこともある。皆さん、笑っておられようですね。でも、これが笑い話ですめばいいんですが、笑えない話として出てくるということが、やっぱりあるわけです。

7. 「飲む、鬱、買う」

こういう現象っていうのが、10年ほどぐらい前から全国的に起きています。大都市部を中心とした大阪や、そういったところはかなり多くあるんですが、こういう状況っていうのがあるんです。私は、こういうことに関するテーマで、この夏、ほんま40日間で30回講演を頼まれました。ほとんどが学校の先生たちを対象としたものだったんですが、あるところでこんなことを耳にしました。皆さん、放蕩な亭主のことを指しまして「飲む、打つ、買うのやりたい放題」という言葉を言うことがあると思います。あの場合の飲むは、お酒を飲む、打つはバクチであります。買うは女性を買うこと。こういう意味で使われる形になっているんですが、今、教師の世界の中で、「ノム、ウツ、カウ」が流行っているんです。順番に説明していきましょう。

一つ目の「ノム」は、酒を飲まないとやってられない、この点は同じです。「ウツ」は何か。バクチじゃないんです。鬱(うつ)病なんです。最後の「カウ」は、何か? 宝くじです。宝くじを買って「1等の2億円、3億円が当たったら、教師なんか辞めたる!」これです。かく言う私も、その話を聞きながら、「うんうん」と思わず納得しながら、自分もそうかもれないというふうにも思ったりするわけです。

ここにおられる皆さんの半分が学校の先生たちと言われましたが、こういう状況っていうのは、先生たち

にとってみればかなり実感性のあることですが、あと半分の方たちにとってみれば、「小野田って...、何を話ししてんねん？」と思われるかもしれません。

しかし、これは、私が全国をいろんな機会を追って集めてきた中で言える一つの象徴的な現象であり、事実だっていうふうに思っております。この事柄を、私はきちっとした学問という対象に何とかできないだろうかというふうに思いながら、けったいなことですがやってきましたし、いくつかのアンケート調査をしてきました。

そういったことが、九州のほうでも、7月3日付けの朝日新聞に大きく取り上げられ、ご存知と思います。その後、9月の下旬にテレビの番組再編期のときにも、今年は、ずいぶん先生たちがスタジオに登場することが多くなりました。あそこの中で、むしろ学校の抱えるしんどさを取り上げるっていうケースが多くなったことにも繋がっていくことにもなっていくわけなんですけど、そういった事柄を、私自身としてはやってきたつもりです。

8. 匿名性と権威性の活用という問題

実は、こういった流れの中で、そのイチャモンの中身っていうよりは「匿名性」と「権威性」ということに気がつくようになりました。プリントでいきますと、下のほうに書いてあるページ数で、5ページの上のところの太字で書いてあるところです。無理難題要求（イチャモン）というのは、よくよく考えてみますと、中身そのものが「無茶やで」、という内容のものになるわけですが、実は、その内容だけではなくて、その方法においてかなりの特徴があるんじゃないかっていうことを気づくようになりました。それが匿名性と権威性です。匿名性っていうのは、どこの誰かを名乗らないっていう形です。これはもちろん様々な形で要求を言うときに、立場が弱ければ、それを自分が誰であるかを悟られないように言うことは大事です。これは、あって当然だろうというふうに思います。

しかし、この匿名性っていうのを巧みに使うということが、もう一つの権威性っていうことと繋がります。ある問題が、その担任の先生との関係で生じていたとした時に、その担任の先生にも言わないで、いきなり校長室に持ち込まれるっていうケースがあります。いや、校長さんも知らないのに、大分市教育委員会に持ち込まれることがあります。いや、大分市教育委員会も知らないのに、大分県教育委員会に。いや、大分県教育委員会も知らないのに、文部科学省に直接行くという、こういうケースがいくつかあります。

私の知り合いに文部官僚がいますし、教え子も文部官僚になっておりますが、彼らから話を聞くと、「ほんまに増えてきた。」と言います。ある日突然、（文部科学省に）電話がかかってくる。何の話かっていうと、大分市立 小学校の話なんです。それが文科省に直接いっているんです。文科省の人が話を聞かされて、だいたい1時間ぐらい聞かされるわけですが、「あーあ、そうですか...」と思って、「すみません」と言いながら、こうして、心の中ではムカムカして、「いいかげんにせんかい！ 大分県教育委員会！」と思いつつ、「はい、重々言ってきかせます」と言ってガチャンと電話をきったあと、大分県教育委員会に「こら！ こんなが電話あったで！」と言ってかける。大分県教育委員会は、「すみません、すみません」と言いながら、「ええかげんにせんかい！ 大分市教育委員会！」って対応しながら...。いや皆さん、私は実際にあった具体的な話をしているわけじゃないですよ、例えばの話ですから誤解のないように。これは、あくまで例えばの話ですよ。

そしたら大分市教育委員会は、「ああ、これはいかんよ。何とか校長！」って形で今度は学校あてに電話をします。なんとこれまでに四段階あるんです。直接学校に言えば、その段階で問題は片づくのに、四段階もある。そして、こういった中では、どこの誰かを名乗らないという形になります。それが「匿名性」です。

こういう状況っていうのが、ここ5、6年前から、やっぱり増えてきたというところがあるわけです。これで残念なことに、様々な人権という観点からいって難しい問題も起きています。

ある学校で特定の子どもを排除するために、これが使われているケースっていうのは関西あたりでもいくつかあるんです。「おい、小学校の何年何組に、こういう子どもがおるやろ？ あの子がおるせいで、うちの子どもが勉強できへんやないか！」。こういうのが教育委員会にスポンといくんです。もちろん、どこの誰か名乗りません。こういう状況っていうのが一方で起きています。私は、こういったことが日本の今の社会の現実だとすれば、これがなぜそうなっているのか、こういう社会の行き着く果ては何なのかっていう問題を、しっかり考えなきゃいけないというふうに思ってきております。

9. デニッシュパンは「災いをもたらすパン」？！

こんな話をしますと、今日は、大分県教育委員会が教育委員会や学校の回し者を、大阪から、わざわざ連れてきたんとちがうんか？ 刺客を連れてきたんとちゃうか、というふうに思われるかもしれませんが、いいえ私は、こういう話はPTA向けでも同じように言ってます。最近、なぜかPTAからも、こういうことで話を頼まれることも増えました。これらは事実として、何が起きているかを冷静に考えるチャンスだというふうに、私は思っているからであります。こういうふうなイチャモンっていうのは、学校現場だけに起きてきているわけではありません。つまり私たちの身の回りの社会の現実の中にもたくさんあります。プリントの5ページのところにも書きましたが、一つの例をお話します。

私が長崎大学のときから、家族同士でお付き合いしていた友人の方がおられました。今は熊本の片田舎に引っ込んで年金生活をしておられる方ですが、いのちの電話あるいは家庭裁判所の調停委員だとか、そういうことをボランティアでやりながら暮らしておられます。5カ月前、その方が、たまたま京都のほうで、いのちの電話の研修会があったということで来まして、私のところに泊まりにきました。そこでそのときに「小野田さん、今、何やってんの？」って言いましたから、「いや、実はね、こんなのをやってまんねん」っていう形でもって、この冊子（『人と人が結びあえる社会であり続けるために～学校への要望、苦情そして「イチャモン」』）を差しあげました。そしたら翌朝になりまして、「小野田さん、おもしろかった、これ。だけどこれって、教育や学校の世界のことだけじゃないよね。」と言って話し始められました。その方は、教育の世界とは何の関係もないところで生きてこられた人です。

この方が、こういうことを言われました。よく好きで行く熊本の片田舎のパン屋さんがあるらしいです。そこは自家製のパンをつくっている普通のベーカリーです。半年ほど経ったら、不思議なことに気がつきました。なぜかデニッシュタイプのパンが、お店に一個も置いてないんです。デニッシュタイプのパンというのは何かというと、分かりやすくいえば、パン生地にバターが練り込んであって幾層も重ねてあるやつです。一番分かりやすいのは、クロワッサンというタイプです。食べると、結構ボロボロ落ちてくるっていうやつですね。香ばしいですね、あれは。しかしその手のパンが一個もないんです、そのパン屋さんには。「何でないんですか？」と、お店の人に聞いたところ、下を向いて「デニッシュタイプのパンは災いをもたらすパンだから、つくらないことにしてるんです」と。言われた私の友人のほうは、何を言っているのかよく分からない。「災いをもたらすパン？」ってどういうことかと。

こんなことがあったそうです。ある方が、ごく普通の方ですよ。パンを幾ばくか買って帰っていったところ、30分経ったら、店のところに戻って、ドーンとドアをあけるなり、「こら、おまえんところは、何ちゅうパンをつくっとんや！ おまえんところのパンを買って、うちの子どもが車の後部座席のところであんなら、ボロボロボロボロすぐこぼれてきやがって、座席シートが汚れたやないか。何ちゅうパンをつくっとるんだ！」と、大変な剣幕で怒鳴り散らしたんだそうです。お店のほうからすると、「ええっ?! だって、そのパン買ったのはあんたやろ？ 食べたの、あんたの子どもやろ？ デニッシュタイプのパンは、そもそもただでさえ普通フランスパンより（パンくずが）落ちやすいものが特徴なのに...」って思いながらも、その大変な剣幕に気圧されるような形で、「すみません」って、平身低頭して謝まらされ続けるんです。これが

もう心の傷(トラウマ)になっちゃったんですね。

それで実は、このことがきっかけでデニッシュタイプのパンをつくるのを止めちゃったんです。もしこの論理が通用するんなら、えらいことです。うどん屋さんでは、カレーうどんは出せません。食ったら、「ああ、(カレーの汁が服に)付いたやないか!」と。こうなるわけです。これと同じことになるわけです。

大阪あたりでは放送されているCMがあります。こちらではやってないかと思いますが、見られた方があるかも分かりません。歯磨き粉や洗剤を作っている大手のメーカーの、洗剤に関するコマーシャルが放送されています。そのコマーシャルの大阪バージョンは、またすごいバージョンで放映されています。何かというと、若いお母さんがいまして、そして、その横に幼稚園児か小学生の低学年の子が、買ったタコ焼きを食ってるんですね、こういう形で。タコ焼きを食ってるんですが、そのタコ焼きがポロッと、服に付くんです。すぐ「ワッ、(服を)汚しちゃった」。洗剤のコマーシャルですからね、この話。そうしたところ、お母さんは、何て言うかということ、大阪城の目の前に屋台のテントがあって、そこでタコ焼きを売っているんですが、そのおっちゃんに、「ちょっと、おっちゃん。あんたんとこソース付けすぎちゃうん?!」っていう形で言うわけです。そっちにいくんです。すごいコマーシャルって、僕、思いましたけど。「これやると、大阪人は、みなこうやと思って誤解されるんちゃうのかな」と思いながら見てましたけど。そういうような話は、笑い飛ばせればいいんですが、実はそういった渦中に置かれると、そういうわけにもいけなくなるというのが、今の日本の現実なのかもしれないと思うわけです。

10. 社会全体に広がっている「言ったもん勝ち」の風潮

昨年12月に、テレビを見ていたときに、私はアッと驚く報道に接しました。昨年9月に東京の墨田区で、ある会社員の方が自宅アパートで殺されていたという事件がありました。警察は一所懸命、その犯人を捜そうと思って知人関係、縁故関係、いろんな関係を捜したんですが、犯人がなかなか見つかりませんでした。3カ月経って、ようやく犯人が見つかりました。何と近くの牛井屋さんの店長だったっていうんです。殺人犯は、牛井屋さんとこの会社員を結び付ける接点というのは、会社員が、ときおり食べにいくという、その接点ぐらいしかありません。これがバーやスナックでしたら、痴情関係のもつれとか何かそんな形になるんでしょうけど、マクドナルドの店員との間とか、ミスタードーナツの店員とという関係では、まずないのと同じように牛井屋さんとは何の関係もない。

実は、背景があるわけです。この会社員が、数カ月前から牛井屋さんにやってきては、あれやこれやと難クセをずっとつけていたんです。別にその筋の方じゃないんです。ごく普通の市民の方なんです。その方が、きっかけは牛井弁当だったんだそうです。牛井弁当を買って、アパートに帰って食おうと思って蓋を開けたところ、具が斜めになっていたんだそうです。そりゃ、そういうことってありますわな。こうやって振りゃ、そりゃズルズルズルッと、天井にしろカツ丼にしろズルズルズルッと落ちることはありえるわけです。それがきっかけです。それでもって店に行って、「牛井弁当が斜めになってるやないか!」って。これなんです。このことがきっかけとなって、ずーっと、ことあるごとに店先に来て、がなり立てるわけです。お店にとっては、他のお客さんもいますから、完全な営業妨害になります。今、飲食店関係は、お客さんとの関係では最も弱い立場にあります。こういった状況を見透かすような形で、また責める場合もありますので、そういうことがあります。

そこでこういう状況にたまりかねて、短絡的といえば短絡的かもしれませんが、雇われ店長は、「もはや殺すしかない」と、こうなるわけです。そこで、会社員がひとしきりがなり立てたあと、あとをこっそりつけて行って、自宅アパートにたどり着いたところを殺したということなわけでありまして。殺したほうが、明らかに悪いです。ただ、私が考えるイチャモン学という形でいきますと、なぜ、この会社員のほうは、そこまでして牛井屋さんを追い詰めたのかという、こちらのほうにむしろ関心があります。牛井弁当が斜めにな

っていたことが、そんなに悔しいんでしょうか。違うと思うんですよ。この会社員そのものが置かれている状況がポイントだと思います。彼はおそらく、会社の中で様々な競争主義や業績主義の中で、「お前は、愚図で馬鹿で、のろまだ」と言われ続けて、そういった意味でのフラストレーションがずっと溜まっていく中で、そのはけ口として、たまたま牛井屋さんがあった。しかもこういったときは、必ずいろんなところでウップンばらしをやっていると思います。そのときに、最も自分にとって好都合な反応をしてくれるところ（牛井屋の店長）に集中的にいくっていうことがあるんです。たぶんそういう状況だったんでしょうね。

いままで、いくつかの象徴的な例をお話ししましたが、皆さん方の日常生活の中でも、これに関して思い当たることはあるのではないのでしょうか。つまり、この問題は、私たち人間が、常に理性的な存在で合理的な思考をして、そして行動できるかということに関わる問題だと思います。キレイやすいという言葉が言われだして、もう20年近く経ちます。この言葉が使われだす時期ともあわさるんですが、私たちの日常生活の中で、自分がそういうような文句言い=イチャモン垂れになっていないか。あるいは、人がそういうことをやっていることに対して、それを自分がどう判断するかという、大事な問題でもあるというふうに思うんです。こういったものが、世間にはたくさんあって、それがいま教育や学校の世界の中に、しみ出てくるということがあるわけです。

実は、10年ほど前から病院関係のお医者さんと話していると、これがやっぱりすごく出てきています。5年ほど前から、弁護士さんのレベルでも文句をつけられていくということがあります。その意味からすると、今の時代状況そのものが、まさにこういう状況が、ごく当然であるような形になっているのかもしれないと思います。まさしく「言ったもん勝ち」。こういう形なのかもしれません。

11. 今の社会そのものが、果たしてまともなのか？

でも、こういう社会っていうのはまともでしょうか。健全でしょうか。そういう社会にしないために、きちっと人と人が結びあえるっていうところで、人は信頼できるんだということを含めて行動できるところを、どうやってつくっていくかが大事だろうと思います。

しかし、残念ながらいまの政治を見れば、私から言わせれば無茶苦茶な「構造改革」の連続です。私のところの学生たちでも、正職員に就いている卒業生っていうのは、全体の3分の2。3分の1は派遣労働や契約社員という形です。5年ほど前に「七五三」ということがいわれました。中卒の7割、高卒の5割、大卒の3割が3年以内に職業を変えているっていわれましたが、私のところで、それなりに統計をとってみても、ほんまにそうです。こういう状況っていうのがあります。

1週間前、来月結婚式を名古屋で挙げるという二人が、私のところに挨拶に来てくれました。私のゼミ生同士です。一人は文科省の官僚。彼は、毎日帰るのは2時です。夜の2時。もう一人がIT関係でシステムエンジニアをやっているんです。この子は埼玉まで出掛けていきまして、片道2時間かけて帰ってくる。帰り着くのが12時です。しんどいですね。正直言って、うちのかみさん共々話したのですが「子どもができて休業に入るか、どちらかが仕事を辞めるっていうやり方をしないと、なかなか夫婦生活も含めて、長続きするのか不安だな」というのが、ふと頭をよぎりました。

あるいは、時給800円で毎日、一所懸命働いても、年収200万いかないんでっせ。皆さん、計算してみれば分かります。800円掛ける8時間。ハッパ64。20日間働いても、12万から13万。それが12カ月足しても160万円そこそこです。こういう状況も含めて、今の社会だとか政治だとか経済の状況っていうのが、非常に様々な形で息苦しいものをつくりだしているというのもあると思います。私は、そういったような形のものも含めて、こういう現象っていうのは、どこでそうなってきたかということを考えながら、考察をつづけてきたわけです。

さて、こういう話をしていると、実は「そういうように、お前は言うけども、問題がある教師もいるや

ないか!」、こういうふうな形で反論が常に出てきます。私も、十分そのことは知っています。それは大学の教師だって、いろいろ問題のある人はいます。新聞にも載ることがありますし、きちっとしたデータにもなっていますから、「絶対にいない」なんて、私は口が裂けても言いません。確かに「います」。小中高等学校の教員の中にもいます。でも同じように、それは普通の会社員にだっているはずですし、別の公務員の世界だって、自衛隊の中だって覚醒剤を使っている人だっているし、という形であります。しかしそれは、本来あってはならないことだと思います。

しかし、それはそれとして、どういう形で、そういう人たちに対して処分を下して、そういう人たちを早くお引き取り願うか、という論議を考える事柄と、もう一方で、学校というところに、どういう形で保護者が要求を出していくかっていうこと、つまりその出し方をどう考えるかっていうことは、私は別の問題として考えるべきだと思います。これがいっしょくたになってしまっただけで、「どっちもどっちだ!」。こうやってしまうと、どっちも浮かばれないんです。問題はどこにあるかを、一つ一つ確実に、整理をして進めていくことが、私は大事だというふうに、こう思っているわけです。

12. 教職員が子どもと触れ合う時間が減少すればするほど、イチャモンは反比例して増える

時間がありませんので、プリントをかなり端折りながらいかせていただくことにしますが、6ページのところまで飛ばしていただきます。

実は、先ほど言いましたように、こういうイチャモンの現象っていうのは、社会全体に通底する問題なものですから、なかなか根が深いというふうに思っています。こういった中で、よくマスコミの記者のほうから、「小野田先生、こういうのを解決する抜本的な解決策はありますか」って、よく聞かれます。私は、いろいろ考えてきましたけども、今の時点では、こう答えています。「ない!」。はっきり言います。だって社会全体にあって、それが染み出るようにして学校現場に及んでくるわけですから、その部分を含めて、どう考えるかってことをやらない限りは無理だってふうに思っているわけです。

ただ、この問題をできるだけ小さい段階で解決していく方法はいくつかあるかもしれないというふうに思います。そのことを言っているのが、6ページのところに書いてある「小野田の定理その1」です。「何やねん、お前、この定理って」思われるかもしれませんが、実は「教職員が子どもと触れ合う時間が減少すればするほど、イチャモンは反比例して増える」ということです。これは、私が、2千ぐらいの事例を集めてきて言える大原則なんです。この5、6年間、私からみれば、日本の社会と教育の状況は異常です。2、3年でポイ捨ての「教育改革」です。その中に、合理性がどこまであるのか疑わしいような「教育改革」が、学校現場で渦巻いています。そういった中で、の尻拭いを、学校現場が相当させられてきているというのがあると思っています。私はそういう状況を、10年ぐらい前から「教育改革病という病気だ」ということを言い続けてきました。

教育改革っていうのは、未来の社会をどういうものとして設定するかということだと思います。私は、今の「教育改革」を、いろんな形から考えてみても、この行き着く果ての社会はどのような社会なのか、が見えないんです。私も教育学の研究をやって30年ですが、残念なことに、この10年間、見れば見るほど混迷の度を深めています。

学校現場に身を置いてみれば、教育委員会から（教育改革が）降ってくるっていうふうに一見、見えます。教育委員会に身を置くと、実は、それは議会からも降ってくるし、文科省からも降ってくるし、マスコミからも降ってくる。こういう状況にあると言っても過言ではないというふうに思うわけがあります。

私は、この5、6年間、学校現場を歩き回ってみて、これほどまでに教師が子どもと接する時間が減ってきているのかっていうことは、本当に危ないというふうに思っています。小学校や中学校の先生、ここに何人もおられると思いますが、ほんまに如実に減ってきたのが、この5、6年間ではないかと思っています。子ど

もと向き合っているより、書類に目を通していかパソコンに向き合っている、こういう状態です。ここにおられるお父さんやお母さん、保護者の皆さん、学校というところに、ぜひ1日でも2日でもいいから、先生に小判ザメのように張り付く形で一緒に動いていってみてください。「そんなヒマないわ」と思われたら、1時間でも結構です。いま学校の教師が、どのようなサイクルで、どう行動しているかってことを見ていただくと、よく分かるはずだと思います。

13. 忙しさは、他人と向き合うタイミングも奪う

これは実は、私自身の経験でもあります。大学も無茶苦茶忙しくなりました。昨年の4月から、私の勤めている大阪大学も、山崎清男先生のおられる大分大学も、国立大学がすべて消えて、法人化されました。私も、いつの間にか本人の承諾なく国家公務員から、いきなりその他の団体職員というふうになりました。「俺、承諾した覚えはないけど」、いきなりこういう形のものにポンと追いやられました。

こういった流れの中で、目茶苦茶忙しくなりました。朝、大学に行って、パソコンの電源を入れますと、電子メールがドーンと入っています。100通くらいあります。中には出会い系サイトからもいっぱい、勝手にどっから聞きつけたのかしりませんが、私は、そういうのにアクセスしていませんから、そういうのをまず、ゴミメールとして捨てます。また楽天とかライブドアからも来ています。そういうのはゴミ箱行きです。捨てます、すぐに。残ったやつを順繰りに処理してって、会議の議案書を作っていると、学生がノックします。「あのー先生、相談したいことがあるんですけど」。「あっ、ごめん。俺、これから5分後に会議なんやねん。ほんで、今、その書類作ってる最中や、またにしてんか」という形でもって、そのままになります。

3日後、その件の学生と、「あっ、そうや、何か相談事があるって言ってたな」ということでもって、学生に、「おい、何やった？ このあいだ。3日前、ごめんな」と言って、「何やった？」って言うと、「先生、実は、深刻なことで...」と、こう話します。それを聞いて「何でもっとはよ言わへんねん！」と、こっちが言うわけです。「はよう言おう思ったけど、先生が...」って言うんです。思わず「ああ、そうやった」と。これは大学でも、ほんまに痛感するんです。

つまり、学生と真向かいに向かい合う時間が、その場のタイミングや時間っていうのがないと、問題はもっともって後まで尾を引くわけです。これが小学校、中学校、高等学校だったら、なおさらなんですね。そして、そういった中で、子どもが教師とのやり取りの關係の事柄が的確に親に伝えられずに、部分的なところでしか伝わっていかない場合がある。それでもって誤解を含めたところで、コトが起きている。つまり、じっくりと子どもの問題に向き合うようなことが時間的にあれば、これはかなり早い段階でコトは処理できていくし、そんな關係で強い結び付きも生まれていけると思います。

私に言わせれば、「今の学校現場には、残念ながらその時間的ゆとりがない」。これが最大の問題だと思っています。だから、私はこのことのために、ひとこと言わせていただければ、（この大会は、教育委員会の主催ですが、）きちっとした形での合理性のある改革はいい。しかし、合理性のない改革は、もう学校現場に押し付けるのは、ちょっと待ちませんか。これを至るところで言い続けています。

これをしないと、イチャモンが起きた。「じゃあ、イチャモンのための処理する何かの制度をつくればいいだろう」ということになります。これでは人間は結び付きあえません。人間ていうのは、直接会ってはじめて相手の表情を見て、はじめて言える事柄がある。この部分を、どれだけ大事にできるかどうかってことであります。ここにおられるお父さん、お母さんも、いろんな意味で忙しさがあるかっていうふうに思います。しかし、大事な問題のときには時間をできるだけ先生たちにもとってもらって、忙しければ、夜の9時でも構わないと思います。直接顔をあわせながら相手の表情を見ながら、自分たちの思いを学校の先生たちにぶつけていくことが必要なんだろうというふうに思うわけです。

14. ある弁護士さんからの手紙

そのときに、何が大事かっていうことに関わって、プリントの7ページの上のところの話をさせていただきまます。実は、これ教員向けには、かなり意味を込めて強調しながら言っているつもりなんですが、「本質と現象というのを見間違えたらあかんのやで」ということです。

こういう手紙をいただいております。昨年の夏に、教員の過労死問題を扱っている弁護士さんから手紙をいただきました。読ませていただきます。「先日は、学校賛歌ブックレット『悲鳴をあげる学校』をお送りいただき有り難うございました。早速読んでみました」。いま出てきた『悲鳴をあげる学校』っていう本の説明が必要ですね。お話をしようと思っていたのですが、この本の宣伝をするのをちょっとタイミングを逸してしまっただけですが…。今日、実は、何冊かこの見本を持ってきておまして、さっきのこの『片小ナビ』とか、これっていうのはただなんです。無料なんです。実は、ここにうちの研究室で作った3冊の本があるんですが、これ1冊買っていただきますと1冊おまけを付けるという、グリコのおまけ商法でおわけしています。ですから皆さん方のお手元にチラシがあるのはそのためなんです。また、ちょっと時間がありませんでしたら、その宣伝はさせていただきますが…。そこでおまけとして付けている、この『悲鳴をあげる学校』、この冊子を弁護士さんに差し上げたことがありました。

「学校の先生が過労で亡くなる？」って、こう思っておられる方がいるかもしれません。ええ、実は、ここ数年、先生の過労死っていうのは、社会的に大きな問題になってきているんです。もちろん「ジャパニーズ過労死」というのは国際的な用語となって、かれこれ15年ぐらい経ちます。しかし実は、過労死問題を扱うときに、学校の先生たちが死ぬわけがないっていうふうに、弁護士さんたちが、まず思っているんです。だから、裁判官より以前に、まず担当の弁護士さんを説得するのに、ものすごく時間がかかるっていうのが一般的なんです。この弁護士さんは、そういった中で、先生たちの置かれている状況のしんどさに立ち上がって弁護団を引き受けられた方です。

この方から、こういうお手紙をいただきました。手紙を読み続けます。「学校がイチャモンの対象になっているという点、事例も引用されており興味深く読ませていただきました。イチャモンという点では、私が現在、担当している 小学校…」、ちょっと匿名にさせていただきます。これは結審して判決も出ていますのでとくに問題はないと思いますが。

「 市立 小学校6年生担任のB教諭の過労死事件でも、保護者からのイチャモンないし苦情・抗議によってB先生が消耗させられました。B事件の例では、学習遅進児の女子児童（6年生なんですが、知的障害が部分的にあり、2年生程度の学力だそうです）の母親が午後10時ごろにB先生の自宅に電話をかけて、『保護者の承諾なく、子どもに発達診断テストを受けさせたのは人権侵害だ。教育委員会に訴える！』と訴えはじめました。持ち帰り仕事を中断して電話に出たB先生は、1時間あまりにわたって責め続けられました。B先生は、5年生のときには、この保護者に連絡して、発達診断テストを実施しましたが、5年生のときにテストへの承諾があったので、6年生のときには改めて連絡しないで、中学進学を控えて学習指導の参考にするため発達診断テストを実施したのでした。この保護者は、翌日、学校へも抗議を行いました。校長は、教頭とB先生に、『ただひたすら謝るように』との指示を行い、教頭とB先生を保護者宅に赴かせました。保護者宅では、発達診断テストの問題のほか、B先生が、この保護者の子どもが学校でケガをして帰宅したことを知らなかったことや、通知表が1ばかりであることが納得いかないなど多岐にわたる抗議を受け、ひたすら謝罪したとのこと。

また、保護者は、B先生の弁明は事実と反しているなどと抗議の途中で、その子どもを同席させて、『B先生の話が誤ってる！』と批判させたそうです。B先生は、子どもの言うことのほうが事実と反しているのに、上記校長の指導と目の前で涙ながらに訴える保護者の態度を前にして、それ以上反論しなかったそうで

す。そして、今後、連絡帳にて子どもの様子や学校行事、授業など事細かく連絡すること。その子どものために、授業で使用するプリントとは別の教材プリントを作成して指導することを約束させられました。

この抗議に自信をなくしたのか、ベテラン教諭のB先生は、新採用の先生が自主学習するとき用いる教師入門講座という16巻の書籍を購入して、自宅や帰省した実家で読むようになりました。

この学習遅進児の保護者からの抗議や上記約束の履行、いつまた保護者から抗議・イチャモンを受けるかもしれないとの思いは、B先生に大きなストレスとなって過労死の一因になったと確信しています。『悲鳴をあげる学校』にも指摘されていましたが、改めて学校の体制をみると、学校には外部からのイチャモンや抗議、苦情を処理する制度的な保障がなくストレートに先生が受け止め、場合によっては、先生を職務過重に追い込んだり、教師としての自信を喪失させることになるという問題を考えさせられました。

特にB先生の例でもみられるように、校長などの管理職が、ことなかれ主義に陥っている場合には、弊害はいっそう大きくなります。小野田先生は、このような保護者や地域からの苦情やイチャモンを受け止めて、調整する機関の設置を提案されていますが、私も同感です。

しかし、その機関をどのような立場の人で構成するか、どの程度の権限を認めるかという点については、相当に難しい問題を内包していると思います。調整機関の調整担当者は、一方では、学校現場や教師が置かれている実態を正しく理解して、イチャモンからの防波堤になる人を配置する必要があると考えられますが、他方では、苦情やイチャモンを持ち込む保護者などを納得させるには公平性の確保も必要であり、この両者が両立しえない場合もあると思われるからです。この点で『片小ナビ』は...」。このナビの話はまた続いておりますが省略します。こういったお手紙をいただきました。

残念なことに、この先生は、この渦中で過労死しておられます。その認定をめぐって裁判までいきまして、昨年11月に高裁で判決が出まして、過労死として認定されたということがございました。その渦中での、弁護士さんからのお手紙だったわけです。

15. 本質と現象を見間違えたらあかん

私はこの手紙を読んだときに、真っ先に頭に浮かんだのは亡くなったB先生の姿ではありませんでした。むしろこの保護者の姿でした。この保護者は、どうしてこうまでB先生を追い詰めたのでしょうか？ 発達診断テストの事前了解を得なかったことが、そんなにこの保護者にとって悔しいことだったのでしょうか？ 私は、違うと思っているんです。この保護者の「本当の思い」というのは、我が子に対する、親として当然の熱い思いだったと思っています。

実は、裁判の過程でも明らかになったんですが、この学年は小学校の3年生ぐらい、つまり4年ほど前から学級崩壊現象を繰り返していた、なかなかしんどい学年であったんです。それを、この先生が5年生になったときに受け持ったといういきさつがあります。そういうような状況の中では、障害を持っている子どもに、様々な形で矛盾が一番いきやすいわけです。そして同時に、保護者の方たちにとってみても、我が子がちゃんとその学級で大事にされているか。これは人一倍、これは健常児であろうが障害児であろうが、親としての思いは全く同じであると思います。こういうのがあって、そして先ほど読んだ手紙の中に、ケガをして帰ってきたという中には、親からすれば、それはいじめられて帰ってきたのではないかという、こういう思いが、ずっと沸々としてあったということだろうと思います。

あるいは、私が先ほど匿名性と権威性という言葉で言いました。残念なことですが、特定の子どものみを排除するために、それが使われる。「あの子さえいなきゃ、うちの子どもはもっと勉強できるのにねえ」という陰口が、残念なことにあったかもしれない。それを、聞くとはなしに聞かされていたかもしれない。こういう思いの中で、このお母さんの思いは、「先生、お願い！ お願いだから、うちの子どもをちゃんと見て！」。これが「ほんまの思い」なんではないかと思うんです。これが現象的には、発達診断テストの事

前了解を得なかったことに対する抗議であったことでしょう。

しかし、本質は違う。ここのところだと思います。だから、それを如実に示すように、保護者の自宅に呼ばれたときに、その問題と別な問題も全部出てくるわけです。あれもこれも。これは、この先生、B先生の問題ではないんです。その前からの問題なんです。場合によっては、1年生のときから、保護者の方はそういう思いをずっと持ち続けてきて、どこかでドーンと出てきた、というふうな形のものかもしれないのです。

こういう本質と現象、つまり表に見える現象に振り回されずに、裏にどういう思いを持っているかを学校がきちっと読み取る力を持たないといけないと思うんです。それは一人では無理です。教職員の共同性です。「あのお母さん、どうして、ああまでB先生を痛め付けるのかな?」、「ひょっとしたら寂しいんとちゃうのかな?」「そういえば私、4年生のとき担任やってたけど、こんなことがあったわ」などなど。そういう事柄が職員室の中で会話として出てくれば、これはその先生の問題ではなくて、学校全体としてどう取り組むかという問題になっていくはずの問題だと思います。これができるかどうか。私は、そのところを「本質と現象とあわせて、共同性の発揮だ」と言いました。日本の学校っていうのは、その共同性を発揮できる物理的な条件がちゃんとあるんです。広い職員室、全職員が集まれる構造。欧米の学校にはないすごい大事なポイントだっていうふうに思うんです。こういうのを、どういう形でもう一度活性化するかっていうことが大事なことだと思います。

16. イチャモンは時と人を選ばない

よく「問題のある先生のところで、こういうことが起きるんだ」って言う人がいます。私に言わせれば、「それは間違い」であります。実は、数多の事例を集めてきても言える事柄なんです、そういう先生を避けるようにして、起きていくケースが結構あります。3カ月前、滋賀県のある市の教育委員会から「助けてくれ」って、私に依頼がありました。行ってみたいところ、その市の教育委員会で10人ばかりの先生が病気休職で倒れているんです。それらの先生はほとんどが、教育委員会が考えるエース級の先生なんです。それがバツバツと倒れている、こういう状況です。

「小野田の定理その2」として書いているのが「イチャモンは、時と人を選ばない」ということです。これも実は、重要なポイントとして敢えて言っております。だから、問題の渦中にある先生が問題ではない。全体として、それをどう引き取ることができるか。この部分を考えないと、個人の問題に帰すことによって結局大事な先生をツブすことになるし、ツブれることによって、実は、その渦中にある保護者も非常に残念なことになっていくということがあられるわけです。本質的な解決にならないというふうに思うわけです。このように考えることが大事なんです。

ですから、保護者の方に対してもう一つ言いたい事柄があります、それは、実は今、学校現場っていうのは、こういう状況の中で、非常に受け身に回っているところがあります。保護者としての「思い」は、思いっきりそれぞれの先生に言うべきだと思います。そして、その言い方は、オブラートで包むということも時には必要かもしれませんが、「本音はこれよ」と言っていただけませんか。「そこまでせんとかんのかい、わしらは?」っていうふうに思われるかもしれませんが、ぜひ、それはしてください。この部分の歩み寄りがないと、なかなか今の多忙で忙殺されている学校現場からいくと、このことを受け止め損ねるとい場合が多くあるからです。

この部分が大切だと思います。私たちが、やっぱり人と人が結びあうときに、「本当のことを言うけど、私、こう思うの...」と。言っちゃあいけない一線を越えてはいけません、そういうところをわきまえた上で、どういくかということを考えていく必要があるというふうに思うんです。そして学校の先生方は、ぜひそういうことのウラが、本音は何なのかと、この部分をきちっと見てほしいというふうに思うんです。

こういった問題は、個別レベルで、また些細なものはたくさんあります。「小野田先生。ほんまに私、小

学校の教師を20年やってるけど、困ったわー。ある保護者の人は、『宿題が多すぎるから減らせ』って言うってくる。ある保護者の人は、『少なすぎるから、もっと出せ』って言うってくる。どうせえちゅうんでしょ。」って訊かれることがよくあります。僕は、笑いながらこう答えます。「どっちも本当です」。「要は宿題が多い少ないということが本質的な問題ではなくて、子どもの教育のことで悩んでいる保護者がいて、そのことをきっかけとして、それであんたと話がしたいんだ。こういうメッセージとして、それは解釈しないといけないんだ」と、私は言ってます。

さらにこじれていったケースの場合のいくつかを見ていきますと、当事者は、学校教職員と保護者っていう形になりがちですが、その中で肝心の子どもは置き去りにされるっていうことがあります。私は教育の最大の顧客、つまり誰に対して責任を負うべきかっていったら、それは「子ども」だと思っているんです。その点を間違えてはいけないということも重ねて言っています。何だかんだとトラブルが起きてきますと、どういふに保護者に納得してもらおうかっていうことが常に先になりがちなんですが、その前に、その子どもが、つまり肝心な子どもが、そのことで今、どういう状態に置かれているかということ、きちっと見据える。この点だけは、教師の側も親の側も、間違えたらあかんのです。ここはすごく大事なことだっていうふうに思っています。

17. 教育における顧客満足とは何か？

そのことに関わって、こんなお話をさせていただきます。実は、今、いろんなところで、顧客満足サービスっていうことが盛んによく言われるようになりましたよね。お客に対して、いかに満足度を提供するか。2年ほど前から、文部科学省も盛んに、そういうことを言っています。できるだけそういったものに応えられるところは応えるべきだっていうのは、私も思いますし、ある程度、民間に学ぶべきことも必要かっていうふうにも思います。9年前、大阪に移り住んだときに学校に電話をかけますと、「すみません、何とか小学校ですか？」「うおーい」「すみません、先生いらっしゃいますなら、お願いできますでしょうか」「うおーい」。(このようなつっけんどんな対応に)「お前はそんなに俺と話すのが嫌か！」こう思うような電話の対応だったのが、ここ5、6年間にもの見事に変わりまして、「はい、何とか小学校、ですが...」。こういう形で言うようになりました。これなんかは、ごくごく変わって当然。大事な事柄だと、私は思います。これは別に民間に学んだんじゃないで、ごく普通に考えて、誰もがそういう形で、別に民間でなくて、普通の個人の家だってそうしてるはずだと思いますから、民間だからどうだこうだということと関係ないわけですね。

しかし私が気にするのは、この教育っていうサービスっていうのが、ほかの様々なサービスと混同されている部分っていうのが多くあるんじゃないか、ということであります。実は、教育というサービスは、ほかの商品あるいはサービスっていう点において比較しても、相当の違いがあるっていうふうに思っています。例えば、モノという点でいきます。ここの酒屋さんに行きましてビールを選ぼうとすると、220円か210円で麦芽100パーセントの正真正銘のビールって売っていますよね。その横に、コーン・スターチがいっぱい入った発泡酒って売っていますよね。その横に、半年前ほど前からですけども、第3のビールって称するのを売っています。「軽くヤバイ？」とか言ってやっているのがありますね。サッポロの「スリムス」あるいは「キレ」というサントリーのがあります。これはそれぞれの値段に相当する形での「満足度」があるはずで。今年の夏に私も、スリムスを買って飲みました。喉が乾いていると、最初の一口はすげえうまいんです。ただ飲み終わってから、「これはビールではないんじゃないか？」と、私は思いました。そうです。サッポロは、あれをビールと言っていません。マスコミが勝手に第3のビールと言っているだけで、缶をよくよく見ると、これは犬か猫かと一瞬思いました。「その他の雑酒」って書いてあるんです。犬か猫？「シュ」は、種ではなくて酒という字でしたけどもね。雑の酒なんです。ああ、雑の酒かあ。こういう不満が

あれば、あと100円出して、普通の缶ビールを買えばいい。正真正銘のビールを買えばいい。それで満足するかどうかという、価格に対応した満足度があるわけです。

今日、この会場にも、たくさんの方が車で来ておられると思います。200万円の自動車を買えば、200万円の満足度がそこに付いています。そのときに200万円に相当する満足度がなかったら、「おかしいじゃないか!」と、車のディーラーさんに言って、きちっと補修してもらいます。これが当たり前だと思います。

サービスという、モノではないところでも考えましょうか。私は東京出張のときに、できるだけ安いところに泊まりまして、5,250円のビジネスホテルに泊まるんです。ホテルで2万円のところに泊まるのと、5千円ぐらいのところに泊まるのは、これはモノというものではなくて、サービスという満足度のところですね。5千円のホテルは、こんなふうにしてお風呂(バスタブ)に入ります。さて出ようと思っても、(狭くて)体がはまっちゃって出られない。ふっと横を見ると、バスタブの横にすぐ便器があるわけです。こういう状態です。セッケンなんかみたら、こんな大きな固形セッケンを、いくつも切り刻んだようなのが一個コロンと置いてある。シャンプーなんかにいたっては、ペットボトルの親分みたいなのがあって、こう押しで使う。これが5千円のホテルです。片や2万円のホテルは、まずもってバスルームとトイレルームは別々です。綺麗な包装紙に入ったシャンプーやリンスまであって、思わず持って帰りたくなるようなタオルやスリッパがある。片やこっちのビジネスホテルには、使う気すら起きないようなタオルが置いてある。これが5千円と2万円の違いです。

18. 教育の営みは費用対効果がイコールではない

教育っていうのは、それと同じでしょうか? ということになります。私、あるいは山崎先生も旧国立大学ですが、授業料は年間53万円です。毎年見ていると、53万円は捨てる金っていうふうに見える学生が数人おられます。親は「(息子や娘は)大学にずっと行っているんだろな」と思って授業料を払っています。いいえ、来たことありません。そういう学生は数人います。親は一所懸命払っていますが、いいえ、全然というケースがあります。片やもう一方で、53万円はおろか200万円も300万円にも見合う成果をあげている学生がいる。こういうのが、教育だと思います。

私は実は、語学がからっきし駄目で、大阪に移ったときに語学学校に入ったんです。そのときに、ちょうどその1年前に「トーザ」という語学学校があったんですが、それがツブれて大問題になっていました。私が別の語学学校に入ろうとして、「おたくはツブ潰れませんか?」って言ったら、「ツブれませんか!」って、なぜトーザが倒産したのか、延々説明を受けました。そこで信用して「じゃあ」って言って、私、60万円払ったんです。3回レッスンを受けて、その学校はすぐにツブれました。えらい目に遭いましたわ。何の話でしたかね。そうそう、そういう例えば語学学校だとかパソコンの関係の学校っていうのは自らが、金を出しています。自らが学習しています。この点でいったときに、30万円払ってNOVAに行ったら、みんな英語ベラベラになりますか。ならへんでしょう。こういうものなんです。

こういう状況っていうのが、実は教育なんです。学びや成長に関わる要素は、金額以外に実にたくさんあるのです。こういったことが、さっき例にあげたビールや車などのモノとも違うし、モノ以外の実態のないホテルのサービスという点との比較でも違うのです。お金をかけた、この満足度が最もないのが教育なんです。投資に対しての見返り、費用対効果が最もないのが教育なんです。ここの部分のところを、もう一度冷静に考えることが必要でしょう。もちろん、それでも一方で、保護者の側は、その我が子がどういう形で学びの状況にあるかって考えなきゃいけないし、もう一方で、その信託に応えながら教師がどこまで誠実にやることができるか、このお互いの問い返しが必要だろうと思います。

こういったことがきちとうまく分かり合えるというよりは、むしろ「その成果が上がらないのはなぜか」

という形で、ドンと学校や教師の側に向かって出てくるような傾向が非常に強くなってきている。このところが、おそらく今の時代状況の中に現れている問題ではないかなというふうに思うわけです。

19. レモンのかぶり物を身につけたPTA会長

さて、時間はあと5分しかありませんので、そちらのほうにいかせていただきますが、実は、一つ紹介したい本があります。『レモンさんのPTA爆談』（小学館、2005年7月発行）です。プリントでいきますと、8ページのところになります。山本シュウさんというラジオのDJをやっておられる方が書いておられます。この方が小学館というところから、今年の7月に『レモンさんのPTA爆談』という本を出されました。大分でもちょっと探せば、書店に置いてあるかと思います。取り寄せでも十分できるかと思いますが、山本シュウさんという方が、2年間、小学館の教育関係の雑誌に書いたのを、まとめる形でこの本にしておられますが、これが非常に面白いんです。

山本シュウさんは、大阪の門真というところの生まれで、高校を卒業したあと、アメリカに飛んでいくんです。飛び出して行ってフラフラしているときに、ニューヨークの町でナンパしちゃったんです。ナンパした相手が、実は、アメリカのミュージック界の大御所の奥さんやった。普通なら、「それで殺されてるんちゃうんか」って思うんですが、実は「お前は見所のあるやっちゃ」というふうな形でもって音楽を学び、その後、彼は音楽の世界に足を踏み込み、日本に帰ってきてDJをやっています。

15年ほど前は、オールナイトニッポンの2部でもDJをやっていたという方なんです。実は、この方、東京の品川区に住んでおられるのですが、娘さんが二人おられまして、上の娘さんは、今、中学2年生になっているんですが…。娘さんが、小学校にあがるとき、本当は私学に預けようと思ったけど、私学も金かかるし、「だっせえなあ」と思いながら、公立の学校に行かせた。娘さんが2年生になったとき、ひょんなことから「PTA会長をやってくれへんか」って言われて、「えっ、何でやねん」と思いながら引き受けた。引き受けてから5年間、娘さんが卒業するまで5年間、その学校でPTA会長をするんです。

私は、先月っていうか、9月30日に、山本シュウさんと大阪で一緒に飲みました。おもしろい人です。入れ墨、タトゥーをしているんです。PTA会長で、入れ墨をしている人を初めて見ましたけどね、私、イケてる兄ちゃんなんです。「ニューヨークで入れた」と言っていました。この人が、実は、ダサイと思っていた、その学校のPTA活動を5年間やる中で、「この中には自分たちがやれることが、いっぱいあるでー」って思っていくわけです。

運動会の定番の曲といえば「天国と地獄」。わかりますね。運動会の際に必ずといっていいほど流している曲があります。「あんなもん、あかん。あんなもんやらんで、ほかの曲もいっぱいあるやろ」ということでもって、選曲も含めて、小学生を使って、運動会を盛り上げる曲をいろんな形で探してきてやるわけです。さらにこの学校は、運動会の時、お昼になると、みんな教室に戻って、子どもたちだけが給食を食べていたそうなんです。それを見て「なんで給食なんか食うねん！」という話になって、「いや、実は、お弁当にすると、お弁当を作ってこれない家庭があるから」と学校側は説明した。「それはおかしいやろう。365日1回も作らへんのか。普通のホカ弁屋の弁当でも構わない。そこで買ったものを、別の弁当箱に入れて、それで持ってくるという、そんなことでも構へんのか。弁当にしよう。」っていう形でもって、様々な取り組みをしていくんです。「子どものための、そういう大事な運動会に親自身が、仮に弁当を作ってこれなくても、売っているものを買ってきて、それを別の箱に詰めて持ってくるって形でもって、みんなで弁当を楽しみながら、運動会を楽しむってことが、何でできへんのか？」ってことでもって、いろんなことをやっていかれるんです。

言われてみれば、このことはもっともな事だと思います。実は学校っていうのは、私も見ていまして、ここ20年間「過剰防衛」の歴史が強かったと思います。「突っ込み」に対する「過剰防衛」です。「非難さ

れたら困るから」。そういうふうな形のものの中に、今、レモンさんが烈火のごとく怒った、運動会では弁当ではなくて給食に変更する、ということも入っていると思います。

20. 「突っ込み」と「過剰防衛」

実は、こんなことがありました。2週間ほど前ですが、私が関与している学校の一つがあります。その学校では、この『片小ナビ』を参考にしながら、その学校独自の「学校ナビ」を作りたいという気運が盛り上がりまして、PTAで7人ぐらいで編集委員会ができました。その段階でその学校の会合に行きまして、いろんな話を聞いていました。学校側に、親御さんのほうから質問で聞きたいことがある、ということですし、ぶん多くの質問が、それらが40数項目挙がってきました。

この40数項目の中身のやりとりを見ていく中で、いろんなことがあったんですが、明らかに学校側が守勢に回っているっていうようなことがいくつかありました。例えば、「何でうちの小学校では、徒競走で順位つけへんのや?」。そういう質問なんかがあります。学校側の教頭さんは、こう答えました。「いや、実は、順位つけているんです。」と。「えっ、つけてへんようにみえるけど」。これらは話し合っ、ようやく分かるんです。徒競走ですから、当然のことながら、ヨーイ、ドンで、1位、2位、3位といった形で差が付いてゴールします。ただそのあとに、1着、2着、3着の旗の下に座るっていうことをしてないんです、この学校では。だけど、1着、2着、3着は、本人たちも分かっているし、学校側の記録もつけているわけです。でも、親の目から見ると、昔のイメージで1着、2着、3着の旗の下に座らへんから、つけてないように見える。そういったことが、ようやく説明してお互いにズレが分かるという形になっていきます。でも、こういう(順位づけした旗の下に座らない)状況になっていった背景の中には、学校側がそういうふうなことを、自ら進んでやっていったというよりは、保護者などからのいろんな圧力やいろんな関係の中で、そうになっていた部分だっ、てあると思います。

さらに、こんなこともありました。「何でうちの小学校は、便所にスリッパが置いてなくて、上履きそのまま行かせているんだ?」。こういう質問があるわけです。教頭さんは、しどろもどろになりながら、こう答えます。「実は、本当はあったんです。あったんですが、高学年になるとスリッパの中に、スッと上履きそのまま入れるから、便所スリッパが破れちゃうんです、すぐに。それで、そういうことが何回も続いたから、これ以上やっても、なんともならない。そこで養護教諭と相談をして、足拭きマットを何枚も置くことによって、そのまま行かせる形にして、そういう指導をしているんです。」っていう話をしたわけなんです。そうすると質問で突っ込んだ保護者の方が、「なんだ、そういうことか。それは、そうするとうちらの子ども問題なんですね。」って、はっきり発言されたんです。そうなんです。

「なんで、便所スリッパがうちの学校にないんか」って言ったとき、このときに、それは不衛生やないかっていう形でもって、もちろん、そういう思いを持って「突っ込む」というところがあるんです。でも、その事実やコトの経過を聞いてみたときに初めて、お互いが何を考えなければいけないかが分かり合えます。確かに学校側もおかしいっていえば、おかしいと思いますよ。そういう状況があるからスリッパをなくすことによって、何とかしようっていう形で、コトを収めようっていう格好です。便所用スリッパを置いても、それがどんどんどんどん破れる。スリッパの上に上靴のまま足を突っ込む、スリッパがどんどん破れていく。こういう状況の中で、結局、学校側がスリッパをなくしちゃった。

それを聞いた親御さんたちは、「先生、それ、うちらの子どもが、結局は、やってるってことですね。」「はい」すまなそうに、教頭さんは答えました。「実は、小学校の低学年は問題ないんですけど、高学年になると、ひどいんです。」「ええっ、今、初めて聞いたわ」ってことになりました。親御さんたちは、自分達の問題として、これを引き取ることになったんです。

そうなんです。実は、こういう話し合いすら、今の学校現場には、なかなかなかったんですね。「それど

ないなってますの」「それはなんでやねん」、こういう形の保護者からの「突っ込み」が多くなりました。こういった中で、学校が常に守勢に回りながら進んでいる。こういう部分が多いと思います。このところを、いまひとつ自分たちの問題として、どう考えることができるか、これが大事なことだと思います。

21. 山本シュウ『レモンさんのPTA爆談』

そこで、先程紹介した本のまとめを読む形で、終わりたいと思います。この山本シュウさんが、この『PTA爆談』の中で、最後に言っている事柄、このところが、私の講演のシメになりますので言わせていただきます。

「でも、今やどうや」。8ページのところです。「時は1960年代。抱え込み教育っちゅう言葉が生まれ、そこから抜け出れてないんやな。それは、何かっちゅうと、日本は高度経済成長真っ只中。お父さんたちもいろいろ忙しかったんであろう、そんなころ。全部学校に任せるちゅう教育が始まってしもうたんや。人間形成からなにか。ほいで、昔は家で教えなあかんことやったしつけどかも、『学校の先生、教えてよ、ちゃんと！』って言って、親が突っ込み出した。その流れが現在まで続いて、現在、先生はすごい雑務に追われているワケや。ぶっちゃけ、子どもたちと触れ合う時間を奪われて本末転倒や。頑張り屋の先生にとっては、一番のストレスやと思う。

ほな、そういう状況に追い込んだのは何や。それは驚くかもしれんけど、僕が感じたのは、ぶっちゃけ、われらPTAのせいや。そう、僕が一所懸命やってるPTAや。そりやどういこうこつちや。簡単に言うとな、学校は、こういうことを突っ込まれたとき、ちゃんと説明できて報告できるように、全部記録しておかなアカンって、その報告書づくりに必死やねん。そういう突っ込み、誰が言うの？ PTAや。親たちや。『先生、これどうなってますの？』『先生、学校がそんなんでいいんですか？』……。そんな突っ込まれたらコワイやん。だから、書いとかなアカンねん。そういう雑務に追われてるんや。その上、文部科学省から教育委員会から何から何まで、いろんなことをさせよる！ 現場の先生らはフラフラになる。PTAと学校のせめぎ合い。問題はそれだけじゃなくて、子どもが巻き込まれる犯罪や、逆に子どもが巻き起こす犯罪が増えて、まさに現在は、目に見えない爆弾が、あちらこちらに落とされている戦禍そのものや。そう！ 今は戦争状態！ そういうときに、何が一番大切かっちゅうたら、大人も子どももみんな協力して、自分たちの身を守ることをやろ？ もう一度、今の時代にあった戦後を考えなあアカンねんな。『教育戦争』という名の戦後。今こそ、『本気の心』を持った大人の後ろ姿を、子どもたちに見せなあアカンねん。

僕はこうしてこの本で『教育爆談』をぶっ放してきたわけやけど、実は、今書いたような、レーダーには映らない、もしくは見えにくい、子どもたちを脅かすいろんな形の爆弾を迎え撃つための『爆談』やったんよな。だから、妙な話、やればやるほど『学校の先生を守れ！』って気になってきたんよ。最初は、ぶっちゃけ『先生を責めろ！』って思ってたけど、先生もひとりの人間として大変やねん。そんなに打たれ強くないし、病んでる人もおるやろ。『こんな頼りない先生が先生になっとんのか？』と思うこともあったけど、そいつにもちゃんとしてもらわなアカン。そう考えると、学校の先生を責めてつづすのは簡単なんやけど、そうじゃなくて、子どもたちを守るために、『この先生、守らなアカン！』と思うようになってんな。もちろん守るちゅうても、過保護的な意味やないで。先生の犯罪が過去最高を記録した2004年のデータをみてもわかるように、ぶっちゃけ、そんな先生に早く辞めてもらうのも、その人間の人生を守るちゅうことやしな。それに、もっと根本的に教員免許の取得制度の早急な改善も含めて、先生のことを考えていくちゅうことも重要やと感じているんよな。」

「教育は、もうみんなの問題ですよ！ お父さん、お母さん！ 何度も言うてるけど、どんどん学校に参加してください。でも突っ込みに行くんちゃいまっせ。先生をバックアップ、あるいはヘルプしに行くんでっせ！ それに当然、家庭教育もしっかりしていきましょう！ そのためにも僕ら大人が、いろんなことを

学んでいかなアカンとちやいますか？ まずは、その意識改革から一緒にやりましょ。日本の未来を考えると、日本の子どもたちを考える。日本の子どもたちを考えると、日本の教育を考える。日本の教育を考えると、自分たちが出来ることを考える。その自分たちが出来ることのひとつがPTA活動。

もう一回言うけど、僕の考えているのは『PTA』=Parents（親）-Teacher（先生）-Association（会）じゃなくて『PTAA』=Parents（親）-Teacher（先生）-Area（地域）-Association（会）やから。（つまり「地域」を入れたんですね。）子どもを持つ親だけやない、子どもをいへん人も、おじいちゃん、おばあちゃんももちろん、目の前にいるのが、たとえ自分の子どもやなくてもや！ もうみーんなで、子どもたちをバックアップしていけたら、最高なんとちゃうかな？」。こういうように締めくくってくれています。

22.「イチャモン」の裏返しは「連携」

今この会場の中にもたくさん、いろんなPTA活動をやられて、学校に関わられた方がおられると思います。（PTA活動を）やる前とやっている最中と、やったあとの段階で、いろんな考え方が生まれておられるというふうに思います。しかし、こういったようなことに関わっていくということが、本来子どもたちの教育をみんなで一緒にやっていくということが大事な事柄だと思えます。一方での「突っ込み」、他方での、それに対して何とか守りに入ってガードが固くなって「過剰防衛」に走る。こういう悪循環に一つ一つ手を打って、胸襟、胸を開いて、何が一緒にできるかってことを考えていくことが必要だと思えます。

『おおいた教育の日』っていうのが、そのためにつくられたんだろうと思えます。私は、そういう部分のところ、いろんな企画、今日、こちらに来る飛行機の中でも、ちょうど大分合同新聞もありましたので見せていただきましたが、ずいぶんいろんなことをやられていると思えます。皆さん方が、いろんな地域で、この子どもの教育のために関わっておられると思えます。そのときにお願いしたいことは、先程紹介したレモンさん、つまり山本シュウさんが言っている事柄であります。学校の事柄を、ほんまにどうなっているかを考えるために、学校のことを一緒に知りましょう。そのためには学校に対して自分の思っている思いを、できるだけオブラートに包まずに、「本当はこう思ってますねん」ということを言いましょう。そして学校の側も、そのことに対して、あまりビクビクせずに、「そうですか」という形でもって、手を出しあいながら、一つ一つ作っていける取り組みが、この世の中にはいっぱいあるはずだろうと思えます。そういうものを、どういう形で出していくことができるか。

私は、イチャモンという角度からこの問題を考えていますが、その裏返しは常に「連携」なんです。この問題は、オモテとウラの関係なんです。簡単に言いますと、「イチャモンこそチャンス」なんです。分かりますか。このところをもう一度、教職員の側は、肝に銘じていただきたい。そして保護者の方は、時としてトゲトゲしくなる物言いを、一度、ちょっとそうじゃなくて違う形で、「うん？ これイチャモンになってえへんかな？ そうじゃないかな？」ということを考えながら、それを反省しながら、ちゃんと学校に出していく。

そして、「何だったら、私が、あんたの話、聞いたげるわ」と学校に不満をもって悩んでいる人に呼びかける。この中にも、学級PTA、学年PTAで結構そういう役割をされた方も多いと思えます。「あんたの悩みを聞きましょう」という形で、手を差し伸べる。そういう取り組みが、どうできるかってことなんです。人間ていうのは、ストレートにものを言うときに、「どうしても言わな気がスマン」という部分があります。これはすごく大事な事柄なんです。もう一方で、自分の怒りや感情や思いみたいなものが、どれだけ意味があるかっていうことを考え、一度、誰か近場の他人に話をしてみるっていうことが大事です。その関係を通した中で、学校に「どう思っていることを伝えていくか」が大事です。

そして、そういう中では、「学校、これやってよ」じゃなくて、「私は、こうしたいと思う」「先生、こ

れしてくれませんか？」「私は、ここまでやります」という、このお互いの関係性をつくれるような形での要求の出し方をしていくことが、社会が壊れない、そして学校ということを通して、社会が結びあっている重要な役割だと思います。

私は、あまり諸外国のことをそんなに研究しておりませんが、いろんな角度から見ると、日本の学校っていうのは、学校がそういう地域と一番結び付いている、世界の中で最も結び付いてきているとこだと思います。それが今、様々な形で崩れようとしている事柄に対して、もう一度、このところに何らかの力を加える。それができないだろうか、と思って考えながら、『片小ナビ』のことをやってみたり、イチャモンのことを研究したりしています。

今日は、皆さん方にとって、どれほど腑に落ちる話ができかわかりませんが、取り敢えず、私の話はこれにて終わらせていただきます。どうも有り難うございました。